

# 海に生く人 月

葉山嘉樹  
著

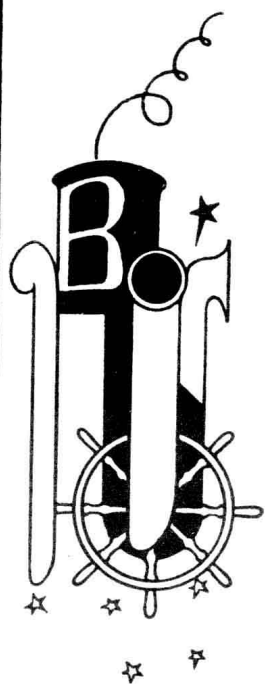
I

IX

II

VI

葉山嘉樹著



改造社  
版

海に生くる人々

## 精選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年 4 月20日 印刷

昭和55年 5 月 1 日 発行

(第11刷)

葉山嘉樹著

海に生くる人々

改造社版

刊 行 財団法人 日本近代文学館  
東京都目黒区駒場4-3-55  
代表者 小 田 切 進

編 集 名著複刻全集編集委員会  
代表者 稲 垣 達 郎

総発売元 株式会社 ほ る ぶ  
東京都新宿区新宿2-19-13  
代表者 中 森 蒔 人

製 作 株式会社 ほるぶ出版  
東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に  
当たり新たに加えたものです。

(一)

室蘭港が奥深く廣く入り込んだ、その太平洋への灣口に、大黒島が栓をしてゐる。雪は、北海道の全土を蔽ふて地面から、雲までの厚さで横に降りまくつた。

汽船萬壽丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横濱へと進んだ。船は今大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方には大きな浪が打つてゐる。萬壽丸はデツキまで沈んだその船體を、太平洋の怒濤の中へこわね覗けて見た。そして思ひ切つて、乗り出したのであつた。彼女がその臨月の體で走れる限りの速力が、ブリツヂからエンヂンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

萬壽丸甲板部の水夫達は、デツキで甲板に打ち上げる、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の飛沫と戦つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖端からは、沸騰點に近い熱湯が迸り出たが、それがデ

ツキを五尺流れるうちには氷るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

萬壽丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つた。悲壯な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危険の前に裸體となつて、地下數千尺で掘られた石炭は、數萬の炭坑労働者を踏み臺にして地上に上つて來た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危険に、その全身を船體と共に曝露しつゝある、船員の労働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひとくたまりやの、氣むづかしやであつた。そして、一體彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑はしいほど、労働が嫌ひな性のやうに見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリツヂに向ひ合つて、水夫室と火夫室との間に、みじめに、小さく拵へられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デツキを掃除してゐるのを見てゐた。彼は此頃ボースンにも、一等運轉士にも見込みが悪いことを知つてゐた。『ストキ(倉庫番)にもワシデツキの時には手傳つて貰はなきやならん。一萬噸も八千噸もある船とは異ふんだからな。』と、いつか水夫

達全部が揃つて飯を食つてゐる時にボースンに云はれたことがあつた。

『フン、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は倉庫の番さへしてりや、それで澤山だらう』と、彼は答へた。

——それ以來、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、ストキは考へた。

## (二)

船のエンヂンはフルスピードをかけてゐたが、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津輕海峡沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは實行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて來るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし初めた。船體は保険マーク以上に沈んでゐるので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデツキへと打ち上げた。そしてデツキは一面の海になつてしまつた、拯ひ込む水は仰々小さな排水口からは急には

出て行かなかつた。デツキには、ハツチの上を通るやうに、ライフライン（命綱）が張られた。いつデツキを通らうと試みても、そこは外海と何等異なる處はないからであつた。

浪はその山と山との間に船を挟んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴體へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鐵製のわが萬壽丸も、この苦悶には堪えかねて、斷末魔の叫びを擧げる。ミリミリ、ドターンとうなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空を廻り廻る。推進器は、飛行機のプロペラのやうに空中で廻轉する。兇暴なその船の太さほどの猛獸のやうに吠える。特別装置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカツプからランプが踊り出る、舵器は非常にその効力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空轉の危険から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から轉換しないやうにのみ總ての努力を盡してゐた。

機關室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動搖のために、機械と機械との狭い部分に入り込むのに、神秘的な注意を拂つた。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持つて、よろけまゝとして骨を折つた。

汽罐室の眞上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同様な方法にして猶、汁物は作るわけに行かなかつた。

コロッパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭中を痛だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかった。

水夫等は、デツキを洗ふ波浪から護るために、ハツチカバー（船艙の蓋ひ）や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な作業であつた。そして此危険な作業なしには、此の船全體が危険から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の悪い馬が馴れぬ乗手にするやうに、船體は猛烈にその脊を振つた。そしてその毎に、柄杓が水を掬ふやうに、デツキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滯とを招いた。然し夫は成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハツチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に、船體の沈没を意味するものであつた。六人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との九人が總動員で、此仕事を遂げた。

彼等はその體が、そのまゝ凍るやうな風の下に、メスのやうに光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、餘り動かない部分をカンカンに凍らせた。

船體の危険と、船體と共にする自分自身の危険と、そして、靦面に自分の凍えんとする肉體に對する危険とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱へ出させたほどの目覺しい、超人間的な活動

を、水夫達に與へた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備が出来上つた。

未だ二つのハッチが船尾の方に残つてゐた。そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢えを感じた。けれども、海も飢を感じて、わが萬壽丸を飲まうとしてゐるのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て闘争した。

### (三)

船を一廊として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此時以上に癪に障り、心細くなり、哀れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意にも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、眞つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にパツと明るく照らす様に、此困難な労働の間に、惑する處の彼等の地位は、全くハッキリした賃銀労働者の正體であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を済まして、船尾のハッチへ行くために、サロンデツキに上つた時であつた。ブリツヂにゐたコーターマスターの小倉が、何か分らぬことを、體中で怒鳴りながら、物凄（ものすごい）い勢（いきどお）ひでブリツヂから飛び下りて來て、サロンデツキを艀（はう）の方へかけて行つて、そのトラツブをまた飛び下りた。

セイラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックからボーイから交替で休んでゐた機關長から、ブリツヂの上の船長から、全部が小倉の飛んでつた行衛を見守つた。

小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリツヂから操るステイムギア（蒸汽舵機）の手鎖と、そのカバーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに潜り込ませてゐたのであつた。

小倉は、水夫見習が樂に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵器は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カバーの金板をバーで動かさうと試みた。此間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此處を洗つた。

水夫全體の力と小倉との力は水夫見習を、鎖とカバーの間から引つ張り出すことができた。けれど

も見習は、引きずり上げられた溺死體のやうにだりとして、眼ばかりを宙につつてゐた。彼は直ちに、水夫二人に擔がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京虫だらけの巢へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でゝもあるやうに、それは凍りついてゐたのである。ついて來た藤原は、その腰のメスを抜いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寢間着が、上かけられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷が出来てゐた。そして左足の拇指が碎けてゐた。ストープがないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若し此のまゝにして置くならば、必ず、始末は早くつくと云ふことを皆知つてゐた。そこでついて來たストキと、水夫二人は、各水夫の巢から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハツチのカバー作業に驅けて行つた。

船尾のハツチは船首のそれと同様の危険と困難さをもつて、作業された。手の届きそうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪は、マストに引つかゝつてそれを抜いてゝも行くかのやうに、はげしくマストを揺ぶつた。水平線は、頭上遙に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。(船の動搖は、同

時に水平線を動かすものだ。ボーイ長（水夫見習を云ふ）の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後にふかのやうに追つてゐるのであつた。

船尾部分のハッチは此上もなく厳密に密閉された。そして、次のは、機関室と、その上部に在る士官室。サロンデツキの陰になつてゐたために、以前の三つに比較べて、作業は樂であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び『おもて』（船首部分）へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪えかねて『お母様、おとうさん』と、両親を叫び求めては、泣いてゐた。そして、暫く息を詰めて、死のやうな沈黙の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寢床の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顔を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一つの窓も開けられてゐない水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得ただけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に當り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕下に立てた。彼は白ベンキのやうに青さめて、そしてくらげのやうに衰へてゐた。

未だ、チーフメートは、何等の手當もしには來なかつた。

彼は、ボーイ長を慰さめた。そして直ぐにチーフメートが『膏藥』を持つて、のろ／＼來やがるだ

う、奴等には、労働者よりも、ブロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがい、皆がついてるからと云つて、ランプ部屋へ仕度に行つた。

萬壽丸は尻尾岬燈臺沖にかゝつた。暴化は其勢を少しも収めなかつた。

水夫等はボートやサンパンを吹き飛ばされぬやうに、それを、より一層殆んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈没した時に決して間に合はないと、證據立てられるほど、それほど頑丈に、くどくどとデツキや煙突にまで、綱を引つ張つた。そして、此の仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、おまけに『てすり』がないので、海へ落ちると云ふ危険を伴つた。ボートデツキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。

水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向けに潜り込んだり、ボートの外側——そこはデツキ板一枚の巾しなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに掴つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ體を傾けたりした。

ボースンは、直ぐ前のブリツヂから、船長が作業を見てゐたために、その禿げた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つたり、焦つたりした。

(四)

陰鬱な薄暗がりだが、海上に這ひ出たゝめに、右舷に尻屋岬の燈臺が感傷的に瞬き初めた。荒れに荒れる海上に、燈臺の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此海の上は、今にも我々の命を奪はうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで搖れ轉ぶ。そこには火もなく、灯さへもない。だのに、あそこには燈臺が光る。その燈臺は、確りと地上に立つてゐて、そこには家族がある。團聚がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鐵瓶がかゝつてゐるだらう。正月の用意の餅がつけてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。『もうねんねするんです。ね、夜食べると、ボン／＼いた／＼ですよ。サ、ねんね』と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。そうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキツスするだらう。そうして、夫と顔を見合せて微笑むだらう。そうして『明日は又随分澤山鳥が落ちてゐることでしょうね。こんなにしけるんだもの、鳥だつて船だつて敵ひませんわね』と、云つて、火鉢から鐵瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて『坊やはい子ねサ、お菓子』と云つて突し抜けに子供にそれを與へるだらう。

だのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、氷のやうに冷酷な船長の下で、労働をしてゐるんだ。俺は、俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下級船員はそうであつた。彼等は、そうでなくてさへも。その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言い渡された囚人が、その家族のことを身も心も弁せ碎けるやうに戀ひ慕ひ、氣遣ふのと異なる處がなかつた。全く、今では、兩舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならないとやらないことであつた。

尻屋の燈臺はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては、白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。

舵手の小倉は、船首を風位から變へないやうに、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムバスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷遙かな沖合に、一艘の汽船が見えた。「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメイトも誰もがブリツヂの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

此少し前から、ボートデツキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであつた。

ブリツヂでは望遠鏡があるために、其汽船は救助信號を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリツヂからは、直ちにエンジンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけやうと云ふのであつた。

全乗組員は難破船が見えること、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデツキへスタンバイした。

わが勇敢な、然も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、萬壽丸は、その臨月の體で、目的の難破船に、僅に船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーツと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いても居ないに拘らず、グン／＼その頭を振り初めた。そして、同時に、物凄い怒濤が、船首、船尾の全部を吞まうとするやうに打ち上げて來た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とかゝらぬ間に、殆んどコースを半回轉しやうとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくことはできたが、本船はその船首を非常な努力の下に従前通りの位置に返してしまつた。

難破船を救ふと云ふことは、本船と一緒に沈める計畫になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども哀れな兄弟たちの乗り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る様になつた。われ／＼は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、掴み處を得ながら見入つてゐた。狂犬の口を蔽ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、此夕暗とに、あの船は吞まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈没に際會した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え残りの煙草程の煙も出てゐなかつた、汽罐に浸水したのはもうすつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧に流れかゝつたばら裂れのやうに帆布が、まとひついてゐた。汽罐に浸水してから、どこかのカバーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かに、デツキの上でバタ／＼と、その切れつ端が洗濯したおしめのやうに振れてゐた。